

教育研究業績書

2024年10月22日

所属：健康生命薬科学科

資格：教授

氏名：稲本 浄文

研究分野	研究内容のキーワード
有機合成化学	遷移金属触媒, 炭素-水素結合官能基化, 複素環化合物
学位	最終学歴
博士(薬学)	東北大学大学院薬学研究科 博士課程前期2年の課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 「反応開発論」	2020年度から現在まで	健康生命薬科学科3年次学生対象の本講義において、これまでの有機化学系科目の総まとめとして、医薬品合成に用いられる反応に関する知識を広範に振り返るとともに、特に近年その利用が活発になっている触媒についての講義もおこない、最先端の研究に触れる機会を積極的につくっている。加えて、毎回の小テストおよび演習問題を取り入れることで、逆合成解析により必要な化合物の合成法を考える力の定着にも注力している。
2. 「発展医薬品化学」	2018年度から2023年度まで	薬学科4年次学生対象の本講義において、有機化学がいかに関薬品のもつ薬理作用を理解するために役立つかを、応用的考察力養成の観点から、分野横断的内容の講義の中で重点的な説明をおこなっている。過去の共用試験および国家試験に出題された問題の提示・解説をおこなうと同時に、特に重要な事項については、問題演習の補助プリントを配布することで、学生自らが手を動かし、内容を十分に理解できるよう努めている。
3. 「有機化学 III」	2016年度から現在まで	薬学科2年次学生対象の本講義において、毎回10分程度の小テストを行うことで、当日の講義内容の定着をはかっている。またこれを講義後に回収し、解答内容を確認することで、常に「学生の理解度」および「講義内容の適切さ」の把握につとめ、担当クラスの実状に合わせた最適な内容となるよう、柔軟な講義実施をおこなっている。MUSES を用いた講義内容および小テストのポイント解説による講義の補完も実施している。理解の不足している学生に対する質問対応の場を設けるとともに、余力のある学生に対しての課題提示もおこない、さらなる知識の深化およびモチベーション向上をはかっている。
4. 「創薬化学の概論」	2015年度から2017年度まで	(2018年度から、新カリキュラム科目「発展医薬品化学」へ移行。)
5. 学位論文の指導	2014年度から現在まで	研究室配属の学部学生および大学院学生の研究指導では、研究内容における日々のディスカッションを通し、研究の遂行はもちろんのこと、学生の問題解決能力・コミュニケーション能力の育成にも注力している。積極的な学会発表を促すことで発表力・表現能力の向上も目指しており、最終的に学生自らが能動的に、研究の計画立案から実施、得られた成果の評価をおこなえるようになるべく、指導している。得られた成果を卒業論文・修士論文としてまとめると同時に、いくつかの論文投稿もおこない、採択されている。
6. 「有機化合物をつくる」および「基礎有機化学実験」(実習科目)	2014年度から現在まで	薬学科2年次および健康生命薬科学科2年次学生対象の本実習科目において、基礎的な実験手技を修得させるのと同時に、扱う有機化合物の化学構造からそれらの物質としての物理的・化学的性質を系統的に理解できるようになるべく、重点的な指導をおこなっている。薬学部卒業生に要求される「広範な化合物の知識と、それを利用した応用可能な化合物取り扱いに関する技術」の修得を指向した解説に、特に注力してい

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
7. 「応用有機化学 II」	2014年度から現在まで	る。 健康生命薬科学科2年次学生対象の本講義において、毎回10分程度の小テストに加え、予習的・復習的な内容の課題を与えることで、講義内容の定着をはかっている。講義中は、積極的に学生からの発言機会を増やすよう努め、緊張感とモチベーションを高めるとともに、コミュニケーション能力や発表力、とっさの判断力の育成も目指している。有機化学を単なる基礎科目としてとらえるのではなく、「実際の医薬品合成における有機合成の役割」や「有機化合物がいかにして医薬品として機能しているか」など、他分野とリンクする内容の解説もおりませ、薬学部生としてこの後学ぶ応用的科目の土台作りをおこなっている。
8. 「有機合成化学」	2014年度から2020年度まで	健康生命薬科学科3年次学生対象の本講義において、毎回10分程度の小テストを行うことで、学生の理解度を適宜確かめながら授業を進めている。また、一定の範囲が終了したタイミングで確認テストもおこない、講義内容のさらなる定着をはかっている。化学構造や化学反応への理解を深化させるため、適宜予習的・復習的内容の課題も課している。講義中における学生への問いかけなどによる積極的な双方向型授業をおこなうことにより、学生の発表力やコミュニケーション能力、問題解決能力の向上を目指している。
9. 「有機化合物の骨格と性質 II」	2014年度から2015年度まで	(2016年度から、新カリキュラム科目「有機化学III」へ移行。)
2 作成した教科書、教材		
1. 「反応開発論」における小テスト 2. 「発展医薬品化学」における演習問題 3. 「薬学基礎演習 III」における演習問題 4. 「有機化学 III」における小テスト 5. 「薬学基礎演習 I」における演習問題 6. 「有機化学実験（有機化合物をつくる、基礎有機化学実験）」におけるテキスト 7. 「有機合成化学」における小テスト 8. 「薬学基礎演習 II」における演習問題 9. 「応用有機化学 II」における小テスト 10. Cross Coupling and Heck-Type Reactions 2	2021年度から 2018年度から 2016年度から 2016年度から 2016年度 2015年度から 2014年度から2020年度まで 2014年度から2016年度まで 2014年度から 2013年03月	授業回数分の小テストを作成した。 講義中の重要な事項について、問題演習の補助プリントを作成した。 授業回数分の演習問題を作成した。 授業回数分の小テストを作成した。 授業回数分の演習問題を作成した。 学生実習に使用するテキストを作成した。 授業回数分の小テストを作成した。 授業回数分の演習問題を作成した。 授業回数分の小テストを作成した。 遷移金属触媒を用いた炭素-水素結合(C-H)官能基化による炭素-酸素結合および炭素-硫黄結合形成反応に関する章(pp.395-437)を担当。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 西宮市共通単位講座 2. 担任クラス指導 3. 幹事懇談会 4. 学生幹事との意見交換 5. 西宮市共通単位講座 6. 担任クラス指導	2023年12月20日 2023年度から 2019年度から(年2回実施) 2019年度から 2018年07月04日 2016年度から	西宮市共通単位講座「のぞいてみたい薬学の世界(前後期、各15回)」の1回分を担当し、『「くすり」を化学する』というタイトルのもと、受講者に薬学における化学の重要性を説明すると同時に、薬学の果たす社会的役割についても解説した。 健康生命薬科学科4年制コースのクラス担任として、学生指導をおこなっている(2026年度まで、予定)。 教務委員として幹事懇談会に出席し、幹事学生と意見交換をおこなった。 教務委員・幹事教授として幹事懇談会に出席し、薬学部の学生幹事の皆さんと意見交換をおこなった。 西宮市共通単位講座「薬学よもやま話(前後期、各15回)」の1回分を担当し、「化学の目で見たくすり」というタイトルのもと、受講者に薬学における化学の重要性を説明すると同時に、薬学の果たす社会的役割についても解説した。 薬学科6年制コースのクラス担任として、学生指導を

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
7. 薬学科5年生・長期薬局病院実務実習	2014年度から	おこなった(2021年度まで)。 円滑な実習実施のため、指導薬剤師との調整をおこなうとともに、担当学生の指導にあたっている。 附属高校の3年生科目である「科学演習実験 III」を、毎年1回分担当している。「4-フェニル安息香酸の合成」実験により、ノーベル化学賞受賞の対象研究である Suzuki カップリング反応を体験することで、有機化学が薬学分野および製薬業界で果たす役割について解説している。
8. 附属高校3年生「科学演習実験 III」	2014年度から	

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 薬剤師免許	1999年04月	取得
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 米国マサチューセッツ工科大学・博士研究員	2006年04月から2007年01月	Prof. Gregory C. Fu 研究室にて「不活性脂肪族ハロゲン化物を用いたニッケル触媒クロスカップリング反応」に関する研究に従事

4 その他		
1. 模擬授業・分野別説明会(大阪府立旭高等学校)	2023年11月9日	「化学のチカラ～薬学への招待～」というタイトルにて実施
2. 指定校訪問	2023年度	7校へ訪問 (兵庫県立伊丹高等学校・滝川第二高等学校・神戸野田高等学校・神戸龍谷高等学校・初芝立命館高等学校・大阪府立泉陽高等学校・賢明学院高等学校)
3. 地域別教育懇談会(本部会場)	2023年年度から2026年度まで(予定)	個人懇談の対応(健康生命薬科学科クラス担任として)
4. 模擬授業・分野別説明会(賢明学院高等学校)	2022年10月19日	「薬学への招待」というタイトルにて実施
5. 模擬授業・分野別説明会(兵庫県立尼崎北高等学校)	2022年7月15日	「化学のチカラ～薬学への招待」というタイトルにて実施
6. 幹事教授	2022年4月から	拝命
7. 指定校訪問	2022年度	6校へ訪問 (滝川第二高等学校・兵庫県立神戸高塚高等学校・兵庫県立伊丹高等学校・賢明学院高等学校・山口県立光高等学校・サビエル高等学校)
8. 指定校訪問	2021年度	2校へ訪問 (兵庫県立尼崎小田高等学校・兵庫県立明石高等学校)
9. 入試問題作成委員	2020年4月から	拝命
10. 地域別教育懇談会(広島)	2019年8月24日	薬学部・教務委員として参画
11. 教務委員	2019年4月から2022年3月	拝命
12. 指定校訪問	2019年度	3校へ訪問 (大阪市立高等学校・大阪府立豊中高等学校・親和女子高等学校)
13. 模擬授業・分野別説明会(兵庫県立伊丹高等学校)	2018年7月17日	「薬学での学び～『基礎』から『最先端』まで」というタイトルにて実施
14. 女性研究者研究活動支援委員	2018年4月から2019年3月	拝命
15. 模擬授業・分野別説明会(百合学院高等学校)	2018年3月14日	「薬学での学び～『基礎』から『最先端』まで」というタイトルにて実施
16. 指定校訪問	2018年度	3校へ訪問 (兵庫県立八鹿高等学校・兵庫県立須磨東高等学校・親和女子高等学校)
17. 薬学部・作業環境測定	2016年4月から(年2回実施)2020年3月	薬学部内の取りまとめ、および測定依頼先との調整
18. 地域別教育懇談会(本部会場)	2016年度から2021年度まで	個人懇談の対応(薬学科クラス担任として)
19. 出前授業	2016年度から2018年度まで	大阪府立今宮高等学校の3年生科目である「医薬学入門」を、他の薬学部教員と共同で担当
20. 指定校訪問	2016年度	6校へ訪問

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
21. 第74回認定実務実習指導薬剤師養成のためのワークショップ in 近畿	2014年9月14日から2014年9月15日	(近畿大学附属新宮高等学校・近畿大学附属豊岡高等学校・兵庫県立八鹿高等学校・兵庫県立須磨東高等学校・雲雀丘学園高等学校・親和女子高等学校) 受講
22. 危険物倉庫・廃棄物管理委員	2014年4月から2020年3月	拝命 (2016年度から委員長を担当)
23. 入試問題作成委員	2014年4月から2017年3月	拝命 (2016年度は薬学部内取りまとめ役を担当)

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. Cross Coupling and Heck-Type Reactions 2	共	2013年03月	Thieme	遷移金属触媒を用いた炭素-水素結合 (C-H) 官能基化による炭素-酸素結合および炭素-硫黄結合形成反応に関する章 (pp. 395-437) を担当. (共著者: John F. Hartwig, Melanie S. Sanford 他)
2 学位論文				
1. 効率的複素環構築法の開発を指向した新規遷移金属触媒反応の開拓	単	2006年01月	東北大学	遷移金属触媒として「パラジウム」および「ニッケル」を用いた新規素反応の開発と、それらを基盤とした効率的複素環構築法の開拓に関する博士論文.
3 学術論文				
1. Chlorobenzene-Driven Palladium-Catalysed Lactonisation of Benzoic Acids	共	2024年1月	RSC Advances 2024, 14(2), 808-811 (Royal Society of Chemistry)	パラジウム触媒 C-H 環化反応において、クロロベンゼンが効率的に再酸化剤として機能することを見出し、これを利用した新規フタリド構築法を開発した. (Masahiro Abe,* Akiho Mizukami, Emi Yoshida, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto*</u>)
2. Synthesis of Aliphatic Nitriles via Desulfonylative Smiles Rearrangement (査読付)	共	2023年10月	Synthesis 2023, 55(19), 3121-3128 (Thieme)	Smiles 転位反応を活用した脂肪族ニトリル化合物の新規構築法を開発した. (Masahiro Abe,* Honoka Jitsumatsu, Mikoto Araki, Akiho, Mizukami, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto*</u>)
3. Gold(I)-Catalyzed Heteroannulation of Salicylic Amides with Alkynes: Synthesis of 1,3-Benzoxazin-4-one Derivatives (査読付)	共	2022年8月	Organic Letters 2022, 24(31), 5684-5687 (American Chemical Society)	サリチルアミド類とアルキン類のヘテロ環化反応が、金触媒を用いることで円滑に進行することを見出した. (Masahiro, Abe,* Megumu Kawamoto, Mayu Inoue, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto*</u>)
4. Site-Selective Iodine Atom Transfer in Fluorinated Alkyl Iodides via 1,5-Hydrogen Atom Transfer (査読付)	共	2022年7月	Chemical Communications 2022, 58(53), 7416-7418 (Royal Society of Chemistry)	フッ素官能基を有するヨウ化アルキルの位置選択的ヨウ素移動反応を開発した. (Masahiro Abe,* Yuka Yokoi, Aoi Hirata, Yumeno Matsuoka, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto*</u>)
5. Nitrile Synthesis via Desulfonylative-Smiles Rearrangement (査読付)	共	2022年3月	The Journal of Organic Chemistry 2022, 87(6), 4460-4467 (American Chemical Society)	Smiles 転位反応による新規ニトリル化合物合成法を開発した. (Masahiro Abe,* Sayasa Nitta, Erina Miura, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto*</u>)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
6. Palladium-Catalyzed Dehydrogenative C-H Cyclization for Isoindolinone Synthesis (査読付)	共	2021年8月	RSC Advances 2021, 11(43), 26988-26991 (Royal Society of Chemistry)	再酸化剤の添加が不要な脱水素型 C-H 閉環プロセスを見出し、新規イソインドリノン合成法を確立した。 (Masahiro Abe,* Kaho Ueta, Saki Tanaka, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto*</u>)
7. A Solvent-Dependent Chirality-Switchable Thia-Michael Addition to α, β -Unsaturated Carboxylic Acids Using a Chiral Multifunctional Thiourea Catalyst (査読付)	共	2020年6月	Chemical Science 2020, 11(21), 5572-5576 (Royal Society of Chemistry)	ボロン酸部位を有するチオウレア触媒を用いた、アリールチオール Michael 付加反応において、溶媒をスイッチすることで得られる生成物の立体配置をコントロールできることを見出した。 (Noboru Hayama, Yusuke Kobayashi, Eriko Sekimoto, Anna Miyazaki, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Tetsutaro Kimachi, and Yoshiji Takemoto*)
8. Retention and Molecular-Recognition Mechanisms of Molecularly Imprinted Polymers for Promazine Derivatives (査読付)	共	2019年12月	Talanta 2019, 205(120149), 1-9 (Elsevier)	プロマジン誘導体に対するモレキュラーインプリントポリマーを合成し、それらの分子認識能の評価をおこなった。 (Jun Haginaka,* Kanae Nishimura, Tetsutaro Kimachi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Yoshiji Takemoto, and Yusuke Kobayashi)
9. Rhodium-Catalyzed Synthesis of Benzo [b]thiophene-3-Carboxamides via Cyclization of (<i>ortho</i> -Alkynyl) phenyl Sulfides in the Presence of Isocyanates (査読付)	共	2019年04月	Chemistry Letters 2019, 48(5), 468-470 (The Chemical Society of Japan)	ロジウム触媒によるヘテロ環化反応を利用した、新規な benzo[b]thiophene-3-carboxiamide 誘導体合成法を見出した。 (Akiho Mizukami, Maika Tsugita, Mako Shimora, Saki Tanaka, Noboru Hayama, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto*</u>)
10. Copper-Catalyzed Intramolecular C-H Amination: A New Entry to Substituted Xanthine Derivatives (査読付)	共	2017年09月	Synthesis 2017, 49(18), 4183-4190 (Thieme)	ウラシル骨格を有するベンズアミジン化合物に対して銅触媒を作用させることにより、分子内 C-H アミノ化反応を経由したキサントシン類合成が可能であることを見出した。 (Maki Shimizu, Noboru Hayama, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto*</u>)
11. Simultaneous Functionalization and Cyclization of 2-Ethynylaniline Derivatives to Indoles (査読付)	共	2017年04月	Heterocycles 2017, 95(2), 920-933 (The Japan Institute of Heterocyclic Chemistry)	2-エチニルアニリンに対する、銅塩を用いた「環化-官能基化プロセス」により、高度に官能基化されたインドール化合物が収率よく得られることを明らかにした。 (Kou Hiroya,* Shin Itoh, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Hiroki Shigehisa, and Takao Sakamoto)
12. Palladium-Catalyzed Highly Chemoselective Intramolecular C-H Aminocarbonylation of	共	2016年06月	Organic Letters 2016, 18(11), 2712-2715 (American Chemical Society)	パラジウム触媒による C-Br 結合存在下での選択的分子内 C-H アミノカルボニル化反応により、臭素原子を有する 6 員環ベンゾラクタム類の合成を行った。 (Hiroshi Taneda, <u>Kiyofumi Inamoto,*</u> and Yoshinori Kondo*)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Phenethylamines to Six-Membered Benzolactams (査読付)				
13. Unusual, Chemoselective Etherification of 2-Hydroxy-1,4-naphthoquinone Derivatives Utilizing Alkoxyethyl Chlorides: Scope, Mechanism and Application to the Synthesis of Biologically Active Natural Product (±)-Lantalucratin C (査読付)	共	2016年03月	Tetrahedron 2016, 72(11), 1423-1432 (Elsevier)	アルコシアルキルクロライドと塩基を用いることで、2-ヒドロキシ-1,4-ナフトキノンのエーテル化が進行することを明らかにした。 (Tokutaro Ogata,* Tomoyo Yoshida, Maki Shimizu, Manami Tanaka, Chie Fukuhara, Junko Ishii, Arisa Nishiuchi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Tetsutaro Kimachi*)
14. Rhodium-Catalyzed Cyclization of 2-Ethynylanilines in the Presence of Isocyanates: Approach toward Indole-3-carboxamides (査読付)	共	2016年02月	Organic Letters 2016, 18(4), 748-751 (American Chemical Society)	ロジウム触媒を用いた 2-エチニルアニリン誘導体の閉環反応をイソシアネート化合物存在下行うことにより、インドール-3-カルボキサミド化合物が効率的に得られることを見出した。 (Akiho Mizukami, Yumi Ise, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto</u> *)
15. The First Enantioselective Total Synthesis of Lantalucratin C and Determination of Its Absolute Configuration (査読付)	共	2015年08月	Tetrahedron 2015, 71(38), 6672-6680 (Elsevier)	抗腫瘍活性を示す天然物である lantalucratin C の、初の不斉全合成と絶対配置の決定を達成した。 (Tokutaro Ogata,* Manami Tanaka, Momoe Ishigaki, Maki Shimizu, Arisa Nishiuchi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Tetsutaro Kimachi*)
16. Unusual O-Alkylation of 2-Hydroxy-1,4-naphthoquinone Utilizing Alkoxyethyl Chlorides (査読付)	共	2015年07月	Chemical and Pharmaceutical Bulletin 2015, 63(7), 485-488 (The Pharmaceutical Society of Japan)	2-ヒドロキシ-1,4-ナフトキノンのメトキシメチルクロリドの反応により、通常の O-MOM 化体に加え、予期しない O-メチル化体が生成することが判明した。詳細な反応条件のスクリーニングの結果、用いる塩基を変えることで、これらの化合物を高選択的に作りわたることが可能であることが分かった。 (Tokutaro Ogata,* Tomoyo Yoshida, Manami Tanaka, Chie Fukuhara, Maki Shimizu, Junko Ishii, Arisa Nishiuchi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Tetsutaro Kimachi*)
17. Use of Tetramethylammonium Fluoride (TMAF) and Alkali Metal Alkoxides as an Activator for Catalytic Deprotonative Functionalization of Heteroaromatic C(sp ²)-H Bonds (査読付)	共	2014年10月	Tetrahedron 2014, 70(43), 7917-7922 (Elsevier)	TMAF またはアルカリ金属アルコキシドを活性化剤として用いることで、オニウムアミド塩基による芳香族脱プロトン化が円滑に進行し、ケトンやアルデヒドなどの求電子剤との付加体が収率よく得られることを見出した。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> ,* Hitomi Okawa, Shoko Kikkawa, and Yoshinori Kondo*)
18. Hg ²⁺ -Trapping	共	2014年07月	Chemical and	オリゴチミジン側鎖を有するポリスチレンビーズを合成し、それが

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Beads: Hg ²⁺ -Specific Recognition through Thymine-Hg (II)-Thymine Base Pairing (査読付)			Pharmaceutical Bulletin 2014, 62(7), 709-712 (The Pharmaceutical Society of Japan)	水銀イオン補足剤として有効に機能することを見出した。(Mitsuhiro Kuriyama, Kaichiro Haruta, Takenori Dairaku, Takuya Kawamura, Shoko Kikkawa, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Hirokazu Tsukamoto, Yoshinori Kondo, Hidetaka Torigoe, Itaru Okamoto, Akira Ono, Eugene Hayato Morita,* and Yoshiyuki Tanaka*)
19. Direct Condensation of Functionalized sp ³ Carbons with Formanilides for Enamine Synthesis Using an <i>in situ</i> Generated HMDS Amide Catalyst (査読付)	共	2014年06月	Chemical Communications 2014, 50(49), 6523-6525 (Royal Society of Chemistry)	トリメチルシリルアミンと触媒量のセシウムフルオリドから系内で発生する HMDS アミド塩基を用いることで、官能基化されたエナミン類が簡便に合成できることを見出した。(Hiroshi Taneda, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Yoshinori Kondo*)
20. Desilylative Carboxylation of Aryltrimethylsilanes Using CO ₂ in the Presence of Catalytic Phosphazene Salt (査読付)	共	2014年04月	Chemistry Letters 2014, 43(4), 477-479 (The Chemical Society of Japan)	ホスファゼニウム塩を用いるアリアルトリメチルシラン化合物の「脱シリル化-二酸化炭素固定化」プロセスを利用した、簡便なアリアルカルボン酸合成法を確立した。(Misato Yonemoto-Kobayashi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Yoshinori Kondo*)
21. Facile Deprotection of Dithioacetals by Using a Novel 1,4-Benzoquinone/cat. NaI System (査読付)	共	2013年11月	Tetrahedron 2013, 69(44), 9192-9199 (Elsevier)	1,4-ベンゾキノンと触媒量の NaI の組み合わせが、ジチオアセタール類の脱保護に有効であることを明らかにした。(Kiyofumi Inamoto,* Tetsuya Yamada, Sei-ichi Kato, Shoko Kikkawa, and Yoshinori Kondo*)
22. Ruthenium-Catalyzed Carbonylative C-H Cyclization of 2-Arylphenols: A Novel Synthetic Route to 6 <i>H</i> -Dibenzo[<i>b,d</i>]pyran-6-ones (査読付)	共	2013年08月	Organic Letters 2013, 15(15), 3962-3965 (American Chemical Society)	ルテニウム触媒による一酸化炭素挿入を介した C-H 閉環反応を利用し、生理活性化合物として広く存在する複素環であるジベンゾピラン骨格を効率的に合成できることを見出した。(Kiyofumi Inamoto,* Jun Kadokawa, and Yoshinori Kondo*)
23. Organocatalytic Functionalization of Heteroaromatic <i>N</i> -Oxides with C-Nucleophiles Using <i>in situ</i> Generated Onium Amide Bases (査読付)	共	2013年06月	Organic & Biomolecular Chemistry 2013, 11(27), 4438-4441 (Royal Society of Chemistry)	系内発生のおニウムアミド塩基により、メタルフリー条件下における <i>N</i> -オキシド類のアルファ位アルキニル化およびヘテロアリアル化を達成した。(Kiyofumi Inamoto,* Yuta Araki, Shoko Kikkawa, Misato Yonemoto, Yoshiyuki Tanaka, and Yoshinori Kondo*)
24. Carboxylation of Alkynylsilanes with Carbon Dioxide Mediated by Cesium Fluoride in DMSO (査読付)	共	2013年05月	Organic & Biomolecular Chemistry 2013, 11(23), 3773-3775 (Royal Society of Chemistry)	アルキニルシランのセシウムフルオリドによる活性化を利用した二酸化炭素固定化を行った。(Misato Yonemoto-Kobayashi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Yoshiyuki Tanaka, and Yoshinori Kondo*)
25. Organocatalytic Deprotonative Functionalization	共	2012年09月	Chemical Communications 2012, 48(78),	アミノシランとフッ化オニウムより系内で生成するオニウムアミド塩基を用いた、複素環類の脱プロトン化と続く求電子剤との反応を達成した。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
of C(sp ²)-H and C(sp ³)-H Bonds Using <i>in situ</i> Generated Onium Amide Bases (査読付)			9771-9773 (Royal Society of Chemistry)	(<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Hitomi Okawa, Hiroshi Taneda, Maomi Sato, Yutaro Hirono, Misato Yonemoto, Shoko Kikkawa, and Yoshinori Kondo*)
26. Efficient Use of a Surfactant for Copper-Catalyzed Coupling Reaction of Arylboronic Acids with Imidazoles in Water (査読付)	共	2012年09月	Tetrahedron 2012, 68(38), 7794-7798 (Elsevier)	界面活性剤使用により、水中での銅触媒 Chan-Lam カップリングを実現した。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Kanako Nozawa, Jun Kadokawa, and Yoshinori Kondo*)
27. Palladium-Catalyzed C-H Cyclization in Water: A Milder Route to 2-Arylbenzothiazoles (査読付)	共	2012年06月	Synlett 2012, 23 (11), 1678-1682 (Thieme)	パラジウム触媒 C-H 閉環反応による 2-アリアルベンゾチアゾール合成が、穏和な条件下「水中」で行えることを見出した。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Kanako Nozawa, and Yoshinori Kondo*)
28. A Highly Sensitive Fluorescence Method Reveals the Presence of Palladium in a Cross-Coupling Reaction Mixture Not Treated with Transition Metals (査読付)	共	2012年06月	Tetrahedron Letters 2012, 53 (25), 3147-3148 (Elsevier)	超高感度蛍光法による、反応系中の痕跡量のパラジウムの定量。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Laura D. Campbell, Takayuki Doi, and Kazunori Koide*)
29. Synthesis of 3-Carboxylated Indoles through a Tandem Process Involving Cyclization of 2-Ethynylanilines Followed by CO ₂ Fixation in the Absence of Transition Metal Catalysts (査読付)	共	2012年05月	Organic Letters 2012, 14(10), 2622-2625 (American Chemical Society)	メタルフリー条件下、2-エチニルアニリン類の閉環と続く 3 位での二酸化炭素固定化というタンデム型プロセスを利用した、3-カルボキシインドール類合成。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Narumi Asano, Yuka Nakamura, Misato Yonemoto, and Yoshinori Kondo*)
30. Tandem-Type Pd(II)-Catalyzed Oxidative Heck Reaction/ Intramolecular C-H Amidation Sequence: A Novel Route to 4-Aryl-2-Quinolinones (査読付)	共	2012年04月	Chemical Communications 2012, 48(36), 4332-4334 (Royal Society of Chemistry)	酸化的 Heck 反応と続く分子内 C-H アミド化というタンデムプロセスを基盤とする 2-キノリノン類合成法の開発を行った。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Junpei Kawasaki, Kou Hiroya, Yoshinori Kondo, and Takayuki Doi*)
31. Use of Dimethyl Carbonate as a Solvent Greatly Enhances the Biaryl Coupling of Aryl Iodides and	共	2012年02月	Chemical Communications 2012, 48(23), 2912-2914 (Royal Society of Chemistry)	ジメチルカーボネートを溶媒に用いることで、Suzuki-Miyaura カップリングが遷移金属触媒を添加せずとも進行することが明らかとなった。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Chisa Hasegawa, Kou Hiroya, Yoshinori Kondo, Takao Osako, Yasuhiro Uozumi, and Takayuki Doi*)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Organoboron Reagents without Adding Any Transition Metal Catalysts (査読付)				
32. A Copper-Based Catalytic System for Carboxylation of Terminal Alkynes: Synthesis of Alkyl 2-Alkynoates (査読付)	共	2012年02月	Organic & Biomolecular Chemistry 2012, 10(8), 1514-1516 (Royal Society of Chemistry)	末端アセチレン類の二酸化炭素によるカルボキシル化を、銅触媒を用いることで達成した。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Narumi Asano, Koji Kobayashi, Misato Yonemoto, and Yoshinori Kondo*)
33. Micellar System in Copper-Catalysed Hydroxylation of Arylboronic Acids: Facile Access to Phenols (査読付)	共	2011年10月	Chemical Communications 2011, 47(42), 11775-11777 (Royal Society of Chemistry)	水溶媒中での芳香族ボロン酸のフェノールへの変換反応が、界面活性剤存在下進行することを見出した。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Kanako Nozawa, Misato Yonemoto, and Yoshinori Kondo*)
34. Total Synthesis of Optically Active Lycopladiene A by Utilizing Diastereoselective Protection of Carbonyl Group in a 1,3-Cyclohexanedione Derivative (査読付)	共	2011年05月	The Journal of Organic Chemistry 2011, 76(11), 4522-4532 (American Chemical Society)	天然物 'lycopladiene A' の全合成を達成した。 (Kou Hiroya, * Yoshihiro Suwa, Yusuke Ichihashi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Takayuki Doi)
35. Use of Molecular Oxygen as a Reoxidant in the Synthesis of 2-Substituted Benzothiazoles via Palladium-Catalyzed C-H Functionalization/Intramolecular C-S Bond Formation (査読付)	共	2010年10月	Advanced Synthesis & Catalysis 2010, 352(14+15), 2643-2655 (Wiley)	酸素をクリーンな酸化剤として用いた、パラジウム触媒 C-H 官能基化～分子内 C-S 形成プロセスによるベンゾチアゾール合成。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Chisa Hasegawa, Junpei Kawasaki, Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)
36. Facile Conversion of Thioamides to the Corresponding Amides in the Presence of Tetrabutylammonium Bromide (査読付)	共	2010年09月	Synthesis 2010, (18), 3087-3090 (Thieme)	テトラブチルアンモニウムブロミドを用いた、様々なチオアミド類の脱硫反応による新規アミド化合物合成法の開発。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Mitsugu Shiraiishi, Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)
37. Facile Synthesis of Asymmetric Quaternary Centers Based on Diastereoselective Protection of the Carbonyl Group at the Symmetrical Position (査読付)	共	2010年07月	Tetrahedron Letters 2010, 51(29), 3728-3731 (Elsevier)	対称性化合物である 1,3-シクロアルカンジオンのジアステレオ選択的なアセタール形成反応を用いる不斉第四級炭素構築法の開発。 (Kou Hiroya, * Yusuke Ichihashi, Yoshihiro Suwa, Tetsuro Ikai, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Takayuki Doi)
38. Palladium-	共	2010年06月	The Journal of	パラジウム触媒を用いた C-H 官能基化～分子内アミド化による 4-ア

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Catalyzed Intramolecular Amidation of C(sp ²)-H Bonds: Synthesis of 4-Aryl-2-quinolinones (査読付)			Organic Chemistry 2010, 75(11), 3900-3903 (American Chemical Society)	リール-2-キノリノン合成. (Kiyofumi Inamoto , * Tadataka Saito, Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)
39. Development of Diastereoselective Birch Reduction-Alkylation Reactions of Bi- and Tricyclic <i>beta</i> -Alkoxy- <i>alpha, beta</i> -unsaturated Ketones (査読付)	共	2009年09月	The Journal of Organic Chemistry 2009, 74(17), 6623-6630 (American Chemical Society)	二環性 <i>alpha</i> -アルコキシ- <i>alpha, beta</i> -不飽和カルボニル化合物に対するジアステレオ選択的な Birch 還元-アルキル化プロセスにより, 新規な不斉第四級炭素構築法を確立した. (Kou Hiroya, * Yusuke Ichihashi, Ai Furutono, Kiyofumi Inamoto , Takao Sakamoto, and Takayuki Doi)
40. Synthesis of the Core Ring System of Awajanomycin from <i>N</i> -Boc-3-methoxycarbonyl-2-pyridinone (査読付)	共	2009年05月	Tetrahedron Letters 2009, 50(18), 2115-2118 (Elsevier)	Lewis 酸触媒存在下における 2-ピリジノンとシリルエノールエーテルの立体選択的付加反応を鍵とする, 天然物 awajanomycin の核となる環構造部分の合成. (Kou Hiroya, * Kei Kawamoto, Kiyofumi Inamoto , Takao Sakamoto, and Takayuki Doi)
41. NHC (N-Heterocyclic Carbene)-Derived Nickel-Pincer Complexes: Efficient and Applicable Catalysts for Suzuki-Miyaura Coupling Reactions of Aryl/Alkenyl Tosylates and Mesylates (査読付)	共	2009年05月	European Journal of Organic Chemistry 2009, (14), 2251-2261 (Wiley)	ビスカルベン型ニッケル-ピンサー錯体の触媒活性評価により, 反応性の低い芳香族トシレート・メシレート類を求電子剤とする Suzuki-Miyaura カップリング反応が高収率で進行することが明らかとなった. (Jun-ichi Kuroda, Kiyofumi Inamoto , * Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)
42. Pincer-type Bis(carbene)-Derived Complexes of Nickel(II): Synthesis, Structure, and Catalytic Activity (査読付)	共	2009年02月	Journal of Organometallic Chemistry 2009, 694(3), 389-396 (Elsevier)	ビスカルベン型ニッケル-ピンサー錯体群の新規合成と X 線結晶構造解析・NMR 等の分光学的手段による詳細な構造決定, およびそれらの Suzuki-Miyaura カップリングにおける触媒活性の評価. (Kiyofumi Inamoto , * Jun-ichi Kuroda, Eunsang Kwon, Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)
43. Synthesis of 6Z-Pandanamine by Regioselective Cyclization Reaction of 2-En-4-ynoic Acid Derivatives Promoted by Weak Base (査読付)	共	2009年01月	Heterocycles 2009, 77(1), 493-504 (The Japan Institute of Heterocyclic Chemistry)	塩基をプロモーターとする 2-エン-4-インカルボン酸の位置選択的環化反応を鍵とする, 天然物 6Z-pandanamine の全合成. (Kou Hiroya, * Kazuya Takuma, Kiyofumi Inamoto , and Takayuki Doi)
44. A New Approach to 3-Substituted Indoles through Pd-Catalyzed C-H Activation	共	2008年12月	Synlett 2008, (20), 3157-3162 (Thieme)	エナミド類のパラジウム触媒分子内 C-H アミノ化反応を利用したインドール合成. (Kiyofumi Inamoto , * Tadataka Saito, Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Followed by Intramolecular Amination Reaction of Enamines (査読付)				
45. Palladium-Catalyzed Synthesis of 2-Substituted Benzothiazoles via a C-H Functionalization/Intramolecular C-S Bond Formation Process (査読付)	共	2008年11月	Organic Letters 2008, 10(22), 5147-5150 (American Chemical Society)	パラジウム触媒存在下, C-H 官能基化/分子内 C-S 結合形成反応を経由する, チオベンズアニリド類からのベンゾチアゾール化合物合成法の開発. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Chisa Hasegawa, Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)
46. Palladium-Catalysed Direct Synthesis of Benzo[b]thiophenes from Thioenols (査読付)	共	2008年11月	Chemical Communications 2008, (43), 5529-5531 (Royal Society of Chemistry)	チオエノール類の閉環反応によるベンゾチオフェン環構築がパラジウム触媒を用いることで円滑に進行することを見出した. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Yukari Arai, Kou Hiroya, and Takayuki Doi*)
47. Catalytic Activities of a Bis(carbene)-Derived Nickel(II)-Pincer Complex in Kumada-Tamao-Corriu and Suzuki-Miyaura Coupling Reactions in the Synthesis of Biaryl Compounds (査読付)	共	2007年09月	Synthesis 2007, (18), 2853-2861 (Thieme)	ビスカルベン型ニッケルピンサー錯体が, Suzuki-Miyaura カップリングおよび Kumada-Tamao-Corriu カップリングの優れた触媒となることを見出した. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Jun-ichi Kuroda, Takao Sakamoto, and Kou Hiroya)
48. Palladium-Catalyzed C-H Activation/Intramolecular Amination Reaction: A New Route to 3-Aryl/Alkylindazoles (査読付)	共	2007年07月	Organic Letters 2007, 9(15), 2931-2934 (American Chemical Society)	パラジウム触媒による C-H アミノ化反応を利用した, ヒドラゾン化合物の閉環反応による新規インダゾール骨格構築法. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Tadataka Saito, Mika Katsuno, Takao Sakamoto, and Kou Hiroya*)
49. Synthesis of 3-Substituted Indazoles and Benzoisoxazoles via Pd-Catalyzed Cyclization Reactions: Application to the Synthesis of Nigellidine (査読付)	共	2007年03月	Tetrahedron 2007, 63(12), 2695-2711 (Elsevier)	パラジウム触媒分子内炭素-窒素結合および炭素-酸素結合形成反応を利用した, 3 位置換インダゾールおよびベンズイソキサゾール化合物合成および本手法を利用する天然物 nigellidine の全合成. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Mika Katsuno, Takashi Yoshino, Yukari Arai, Kou Hiroya, * and Takao Sakamoto)
50. Synthesis and Catalytic Activity of a Pincer-Type Bis(imidazolin-2-ylidene) Nickel (II) Complex (査読付)	共	2006年06月	Organometallics 2006, 25(12), 3095-3098 (American Chemical Society)	ニッケルを中心金属とするビスカルベン型ピンサー錯体の新規合成と構造決定, および触媒的活用. (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , * Jun-ichi Kuroda, Kou Hiroya, Yukio Noda, Masashi Watanabe, and Takao Sakamoto)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
付) 51. Highly Regioselective Palladium-Catalyzed Annulation Reactions of Heteroatom-Substituted Allenes for Synthesis of Condensed Heterocycles (査読付)	共	2005年11月	Chemical & Pharmaceutical Bulletin 2005, 53(11), 1502-1507 (The Pharmaceutical Society of Japan)	アルファ位にヘテロ原子（酸素または窒素原子）を有するアレン類の芳香族ハロゲン化物とのパラジウム触媒環化反応が高位置選択的に進行し、単一の複素環化合物を与えることを見出した。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , Akio Yamamoto, Kazutoshi Ohsawa, Kou Hiroya,* and Takao Sakamoto)
52. Highly Efficient Nickel-Catalyzed Heck Reaction Using Ni(acac) ₂ /N-Heterocyclic Carbene Catalyst (査読付)	共	2005年06月	Synlett 2005, (10), 1624-1626 (Thieme)	N-複素環式カルベンをリガンドとして用いることで、進行が困難であるとされてきたニッケル触媒による Mizoroki-Heck 反応が円滑に進行することを見出した。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> ,* Jun-ichi Kuroda, Tomohiro Danjo, and Takao Sakamoto)
53. Efficient Synthesis of 3-Substituted Indazoles Using Pd-Catalyzed Intramolecular Amination Reaction of N-Tosylhydrazones (査読付)	共	2004年08月	Chemistry Letters 2004, 33 (8), 1026-1027 (The Chemical Society of Japan)	2-ハロフェニルヒドラゾン化合物のパラジウム触媒分子内 Buchwald-Hartwig アミノ化反応を利用した、3 位置換インダゾール化合物合成。 (<u>Kiyofumi Inamoto</u> , Mika Katsuno, Takashi Yoshino, Ikue Suzuki, Kou Hiroya, and Takao Sakamoto*)
54. Palladium Catalyzed Arylation of Malonate Accompanying <i>in situ</i> Dealkoxycarbonylation (査読付)	共	2001年12月	Chemical Communications 2001, (24), 2704-2705 (Royal Society of Chemistry)	パラジウム触媒による芳香族ハロゲン化物のマロン酸エステルとのカップリング反応と続く脱アルコキシカルボニル化反応を経由する、ワンポット "アリアル酢酸" 化合物合成。 (Yoshinori Kondo,* <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Masanobu Uchiyama, and Takao Sakamoto)
55. Photoinduced Cyclorelease for Condensed Heteroaromatic Synthesis (査読付)	共	2000年05月	Journal of Combinatorial Chemistry 2000, 2(3), 232-233 (American Chemical Society)	固相担体上での「パラジウム触媒 Mizoroki-Heck 反応」と続く「光照射によるアルケンの異性化～環化反応」というプロセス (光照射 cyclorelease) を利用した、2-quinolinone および coumarin 合成。 (Yoshinori Kondo,* <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Takao Sakamoto)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 複素環構築を指向する有機合成化学	単	2017年03月	第1回武庫川女子大学薬学部・神戸薬科大学 研究合同発表会 (西宮)	遷移金属を駆使した触媒的炭素-水素結合官能基化による複素環構築に関する、自身のこれまでの研究成果についての発表
2. 遷移金属触媒を駆使して複素環をつくる	単	2016年06月	第2回近畿薬学シンポジウム (大阪)	遷移金属触媒反応を利用した複素環構築法に関する、自身のこれまでの成果についての発表
3. 遷移金属触媒を用いた新規プロセスの開発と、その過程で見	単	2013年08月	日本薬学会東北支部化学系薬学若手研究者セミナー	これまでに見出した遷移金属触媒反応と、その過程で見出したメタルフリープロセスに関する発表。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1. 学会ゲストスピーカー				
つけた遷移金属触媒を用いない反応	単	2013年03月	(仙台) 日本薬学会第133年会 (横浜)	「遷移金属触媒」および「有機分子触媒」を利用した C-H 官能基化に関する発表。 パラジウムによる触媒的 C-H 官能基化を利用した種々の分子変換プロセス開発に関する発表。 触媒的 C-H 官能基化を利用した種々の複素環骨格構築法に関する発表。
4. 遷移金属触媒および有機分子触媒を駆使する不活性炭素-水素結合修飾反応：触媒的高度分子変換プロセスの開発	単	2012年06月	日本薬学会東北支部学術講演会 (仙台)	
5. パラジウムを用いた触媒的炭素-水素結合官能基化を基盤とする新規分子変換プロセスの開拓	単	2010年09月	平成22年度化学系学協会東北大会 (盛岡)	
6. パラジウム触媒による炭素-水素結合官能基化を利用した複素環合成	単	2010年09月	平成22年度化学系学協会東北大会 (盛岡)	
2. 学会発表				
1. 1,5-水素原子移動を経由するフッ素化合物の遠隔位選択的なミニスキ型ヘテロアリール化反応の開発	共	2024年3月	日本薬学会第144年会 (横浜)	阿部 将大, 松岡 由芽乃, 井上 九紅, 水上 玲穂, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
2. パラジウム触媒ヘテロ環化反応による1,4-ベンゾオキサゼピン-5-オン合成法の開発	共	2024年3月	日本薬学会第144年会 (横浜)	阿部 将大, 川元 仁歩, 水上 玲穂, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
3. 金触媒ヘテロ環化反応による3,1-ベンゾオキサジン-4-オン合成	共	2024年3月	日本薬学会第144年会 (横浜)	阿部 将大, 高野 真衣, 水上 玲穂, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
4. 1,5-水素原子移動を活用したフッ素化合物の遠隔位選択的ジアゼニル化反応の開発	共	2023年11月	第49回反応と合成の進歩シンポジウム (岐阜)	阿部 将大, 片岡 あいる, 平田 葵, 矢野 渚紗, 水上 玲穂, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
5. 1,5-水素原子移動を活用したフッ素化合物の遠隔位選択的ヘテロアリール化反応の開発	共	2023年11月	第49回反応と合成の進歩シンポジウム (岐阜)	阿部 将大, 松岡 由芽乃, 水上 玲穂, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
6. 空気酸化による四員環複素環合成法の開発：ベンゾチアゼチジン合成	共	2023年10月	第73回日本薬学会関西支部総会・大会 (神戸)	阿部 将大, 藤田 真希, 水上 玲穂, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
7. 1,5-水素原子移動を伴う Minisci 型アルキル化反応の開発	共	2023年10月	第73回日本薬学会関西支部総会・大会 (神戸)	阿部 将大, 松岡 由芽乃, 水上 玲穂, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
8. パラジウム触媒ヘテロ環化反応による7員環骨格構築法の開発ーベンゾオキサゼピノン合成ー	共	2023年10月	第73回日本薬学会関西支部総会・大会 (神戸)	阿部 将大, 川元 仁歩, 水上 玲穂, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
9. 1,5-水素原子移動を活用した位置選択的ジアゼニル化反応の開発	共	2023年10月	第73回日本薬学会関西支部総会・大会 (神戸)	阿部 将大, 片岡 あいる, 平田 葵, 矢野 渚紗, 水上 玲穂, 来海 徹太郎, 稲本 浄文

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
10. 金触媒ヘテロ環化反応：3,1-ベンゾオキサジン-4-オン合成	共	2023年10月	第73回日本薬学会関西支部総会・大会 (神戸)	阿部 将大, 高野 真衣, 水上 玲穂, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
11. パラジウム触媒ヘテロ環化反応による7員環骨格構築法の開発	共	2023年10月	第52回複素環化学討論会 (仙台)	阿部 将大, 川元 仁歩, 水上 玲穂, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
12. クロロベンゼンを酸化剤とするパラジウム触媒 C(sp ³)-H 官能基化：フタリド合成	共	2023年10月	第52回複素環化学討論会 (仙台)	阿部 将大, 水上 玲穂, 吉田 映美, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
13. パラジウム触媒を用いた脱水素型 C-H 閉環反応によるフタリド合成法の開発	共	2023年3月	日本薬学会第143年会 (札幌)	水上 玲穂, 阿部 将大, 吉田 映見, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
14. 脱スルホニル型スマイルズ転位反応を活用した脂肪族ニトリル合成法の開発	共	2023年3月	日本薬学会第143年会 (札幌)	阿部 将大, 實松 萌夏, 荒木 美琴, 水上 玲穂, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
15. フッ素官能基を活用したヨウ素原子移動反応の開発	共	2023年3月	日本薬学会第143年会 (札幌)	阿部 将大, 松岡 由芽乃, 水上 玲穂, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
16. 1,5-水素原子移動を活用したフッ素化合物におけるヨウ素原子移動反応の開発	共	2022年11月	第48回反応と合成の進歩シンポジウム (千葉)	阿部 将大, 横井 祐佳, 平田 葵, 松岡 由芽乃, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
17. 脂肪族フッ素化合物における位置選択的なヨウ素移動反応の開発	共	2022年10月	第72回日本薬学会関西支部総会・大会 (大阪)	阿部 将大, 松岡 由芽乃, 横井 祐佳, 平田 葵, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
18. 金触媒によるベンゾオキサジノン骨格の迅速的合成法の開発	共	2022年10月	第72回日本薬学会関西支部総会・大会 (大阪)	阿部 将大, 川元 仁歩, 井上 万夕, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
19. 脱スルホニル型 Smiles 転位を活用したニトリル合成法の開発	共	2022年9月	第51回複素環化学討論会 (大阪)	阿部 将大, 新田 早優, 三浦 衣莉奈, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
20. 金触媒によるヘテロ環化反応を活用したベンゾオキサジノン骨格の効率的合成法の開発	共	2022年9月	第51回複素環化学討論会 (大阪)	阿部 将大, 川元 仁歩, 井上 万夕, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
21. 金触媒によるベンゾオキサジノン合成法の開発	共	2022年3月	日本薬学会第142年会 (名古屋→オンライン)	阿部 将大, 川元 仁歩, 井上 万夕, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
22. フルオロアルカンにおけるヨウ素移動反応の開発	共	2022年3月	日本薬学会第142年会 (名古屋→オンライン)	阿部 将大, 横井 祐佳, 平田 葵, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
23. Development of Iodine Atom Transfer Reaction Involving 1,5-Hydrogen Atom Transfer Process	共	2021年12月	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2021	Masahiro Abe, Yuka Yokoi, Aoi Hirata, Tetsutaro Kimachi, <u>Kiyofumi Inamoto</u>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
24. Synthesis of Pemetrexed Medoxomil Ester Prodrugs Aiming for the Oral Administration	共	2021年12月	(ホノルル, ハワイ→オンライン) The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2021 (ホノルル, ハワイ→オンライン)	Kasumi Miyoshi, Noboru Hayama, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Anna Miyazaki, Akira Nakamura, Tomohiro Maegawa, Toru Ohtori, Kenji Matsuyama, Tetsutaro Kimachi
25. Palladium-Catalyzed C(sp ³)-H Cyclization for Synthesis of Isoindolinones	共	2021年12月	The International Chemical Congress of Pacific Basin Societies 2021 (ホノルル, ハワイ→オンライン)	Masahiro Abe, Kaho Ueta, Saki Tanaka, Tetsutaro Kimachi, <u>Kiyofumi Inamoto</u>
26. 吸収改善を目指した新規ベメトレキセドプロドラッグの合成	共	2021年10月	第50回複素環化学討論会 (静岡→オンライン)	三好 加純, <u>稲本 浄文</u> , 宮崎 杏奈, 大鳥 徹, 松山 賢治, 来海 徹太郎
27. Pd/C 触媒による脱水素型イソインドリノン合成法の開発	共	2021年10月	第50回複素環化学討論会 (静岡→オンライン)	阿部 将大, 上田 かほ, 田中 咲妃, 来海 徹太郎, <u>稲本 浄文</u>
28. ベメトレキセド新規アミドプロドラッグの合成—トランスポーターの積極的関与を目指した分子設計—	共	2021年10月	第71回日本薬学会関西支部総会・大会 (大阪→オンライン)	北濱 雛子, 三好 加純, <u>稲本 浄文</u> , 宮崎 杏奈, 大鳥 徹, 松山 賢治, 来海 徹太郎
29. ベメトレキセド新規エステルプロドラッグの合成—吸収改善を目指した分子設計—	共	2021年10月	第71回日本薬学会関西支部総会・大会 (大阪→オンライン)	辻森 理那, 三好 加純, 本田 萌, <u>稲本 浄文</u> , 宮崎杏奈, 大鳥 徹, 松山 賢治, 来海 徹太郎
30. 1,5-HAT 機構を利用したフルオロアルカンにおける位置選択的なヨウ素移動反応の開発	共	2021年10月	第71回日本薬学会関西支部総会・大会 (大阪→オンライン)	阿部 将大, 横井 祐佳, 平田 葵, 来海 徹太郎, <u>稲本 浄文</u>
31. パラジウム触媒による脱水素型イソインドリノン合成法の開発	共	2021年3月	日本薬学会第141年会 (広島→オンライン)	阿部 将大, 上田 かほ, 田中 咲妃, 来海 徹太郎, <u>稲本 浄文</u>
32. 経口投与化を目指したベメトレキセドプロドラッグの新規合成	共	2021年3月	日本薬学会第141年会 (広島→オンライン)	三好 加純, 葉山 登, <u>稲本 浄文</u> , 宮崎 杏奈, 中村 光, 前川 智弘, 大鳥 徹, 松山 賢治, 来海 徹太郎
33. 経口投与化を目指したベメトレキセドエステルプロドラッグの合成および評価	共	2020年03月	日本薬学会第140年会 (京都)	来海 徹太郎, 三好 加純, 葉山 登, <u>稲本 浄文</u> , 宮崎 杏奈, 中村 光, 前川 智弘, 大鳥 徹, 松山 賢治
34. 親水性リンカーを用いた抗腫瘍性小分子	共	2020年03月	日本薬学会第140年会	宮崎 杏奈, 長谷 日和, 葉山 登, <u>稲本 浄文</u> , 日高 興士, 津田 裕子, 山之内 奈那, 福島 昭二, 来海 徹太郎

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
ペプチドミメティックの二量化			(京都)	
35. プロマジン誘導体に対する分子インプリントポリマーにおける保持および分子認識機構：ハロゲン結合の寄与	共	2020年03月	日本薬学会第140年会 (京都)	西村 奏咲, 来海 徹太郎, 稲本 浄文, 小林 祐輔, 竹本 佳司, 萩中 淳
36. The Asymmetric Thia-Michael Addition of α, β -Unsaturated Carboxylic Acid	共	2019年12月	第12回有機触媒シンポジウム (京都)	Noboru Hayama, Eriko Sekimoto, Anna Miyazaki, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Yusuke Kobayashi, Yoshiji Takemoto, and Tetsutaro Kimachi
37. 経口投与化を目指したベメトレキセドメドキシミルエステルプロドラッグの研究	共	2019年10月	第69回日本薬学会近畿支部総会・大会 (神戸)	三好 加純, 葉山 登, 稲本 浄文, 宮崎 杏奈, 中村 光, 前川 智弘, 大鳥 徹, 松山 賢治, 来海 徹太郎
38. ロジウム触媒閉環反応による新規ベンゾチオフェン環構築法の開発	共	2019年10月	第69回日本薬学会近畿支部総会・大会 (神戸)	田中 咲妃, 水上 玲穂, 宮崎 杏奈, 葉山 登, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
39. 多機能性ボロン酸触媒による不斉共役付加反応の開発とキラルスイッチ反応への展開	共	2019年10月	第69回日本薬学会近畿支部総会・大会 (神戸)	葉山 登, 宮崎 杏奈, 稲本 浄文, 小林 祐輔, 竹本 佳司, 来海 徹太郎
40. Synthesis of Pemetrexed Medoxomil Ester Prodrugs Aiming for the Oral Administration	共	2019年9月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress (京都)	Kasumi Miyoshi, Noboru Hayama, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , Anna Miyazaki, Akira Nakamura, Tomohiro Maegawa, Toru Otori, Kenji Matsuyama, and Tetsutaro Kimachi
41. Synthesis of Benzo [b]thiophene-3-Carboxamides via Rhodium-Catalyzed Cyclization of (<i>ortho</i> -Alkynyl) phenyl Sulfides in the Presence of Isocyanates	共	2019年09月	27th International Society of Heterocyclic Chemistry Congress (京都)	Akiho Mizukami, Maika Tsugita, Mako Shimora, Saki Tanaka, Noboru Hayama, Tetsutaro Kimachi, and <u>Kiyofumi Inamoto</u>
42. 多機能性ボロン酸触媒を用いる α, β -不飽和カルボン酸の不斉チアマイケル付加反応の開発	共	2019年03月	日本薬学会第139年会 (千葉)	葉山 登, 関本 英里子, 宮崎 杏奈, 稲本 浄文, 小林 祐輔, 竹本 佳司, 来海 徹太郎
43. ロジウム触媒による閉環反応を利用した, 新規多置換ベンゾチオフェン骨格構築法の開発	共	2019年03月	日本薬学会第139年会 (千葉)	水上 玲穂, 次田 舞花, 下良 菜子, 田中 咲妃, 宮崎 杏奈, 葉山 登, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
44. α, β -不飽和カルボン酸の不斉チアマイケル付加反応の開発	共	2018年11月	第44回反応と合成の進歩シンポジウム (熊本)	葉山 登, 稲本 浄文, 小林 祐輔, 竹本 佳司, 来海 徹太郎
45. ロジウム触媒を利用する新規 2,3-二置換ベンゾチオフェン環	共	2018年10月	第68回日本薬学会近畿支部総会・大会	稲本 浄文, 水上 玲穂, 次田 舞花, 下良 菜子, 田中 咲妃, 宮崎 杏奈, 葉山 登, 来海 徹太郎

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
構築法の開発			(姫路)	
46. 経口投与化を目指したベメトレキセドのプロドラッグ化の研究	共	2018年03月	日本薬学会第138年会 (金沢)	佐野 令奈, 富田 英里, 泉 ありさ, 葉山 登, 宮崎 杏奈, 稲本 浄文, 太田 彪嗣, 大林 優夢, 坂井 裕美, 中村 光, 前川 智弘, 大鳥 徹, 松山 賢治, 来海 徹太郎
47. ロジウム触媒閉環反応を利用した新規2,3-二置換ベンゾフラン合成法の開発	共	2017年10月	第47回複素環化学討論会 (高知)	水上 玲穂, 林 優奈, 葉山 登, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
48. 経口投与化を目指したベメトレキセドのモノメドキシミル及びジメドキシミルエステルプロドラッグの合成と評価	共	2017年10月	第35回メディシナルケミストリーシンポジウム (名古屋)	佐野 令奈, 富田 英里, 葉山 登, 宮崎 杏奈, 稲本 浄文, 太田 彪嗣, 大林 優夢, 坂井 裕美, 中村 光, 前川 智弘, 大鳥 徹, 松山 賢治, 来海 徹太郎
49. ロジウム触媒を用いた新規2,3-二置換ベンゾフラン合成法の開発	共	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会 (神戸)	水上 玲穂, 林 優奈, 葉山 登, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
50. 経口投与化を目指したベメトレキセドのモノメドキシミル及びジメドキシミルエステルプロドラッグの合成と評価	共	2017年10月	第67回日本薬学会近畿支部総会・大会 (神戸)	佐野 令奈, 富田 英里, 葉山 登, 宮崎 杏奈, 稲本 浄文, 太田 彪嗣, 大林 優夢, 坂井 裕美, 中村 光, 前川 智弘, 大鳥 徹, 松山 賢治, 来海 徹太郎
51. 新規ナフトキノ誘導体6-TMNQの血管新生および腫瘍増殖に対する抑制効果	共	2017年03月	日本薬学会第137年会 (仙台)	新屋 智寛, 山村 早紀, 前田 恭佳, 阪中 麻利子, 山下 裕佳, 葉山 登, 稲本 浄文, 来海 徹太郎, 高橋 悟
52. 2016年度薬学部初年次教育(有機化学)における基礎学力強化教育の運用と評価	共	2017年03月	日本薬学会第137年会 (仙台)	西村 奏咲, 川崎 郁勇, 稲本 浄文, 来海 徹太郎, 河井 伸之, 北山 友也, 三浦 健, 安井 菜穂美, 三木 知博
53. α , β -不飽和カルボン酸への直截的不斉アザマイケル付加反応による糖尿病薬シタグリブチンの合成研究	共	2017年03月	日本薬学会第137年会 (仙台)	葉山 登, 関本 英里子, 西林 和也, 稲本 浄文, 来海 徹太郎, 小林 祐輔, 竹本 佳司
54. ロジウム触媒閉環反応を用いた新規2,3-二置換インドールおよびベンゾフラン合成法の開発	共	2017年03月	日本薬学会第137年会 (仙台)	水上 玲穂, 伊勢 悠見, 山内 彩樺, 葉山 登, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
55. 銅触媒を用いたC-H閉環反応によるキサントゲン骨格の新規構築法の開発	共	2017年03月	日本薬学会第137年会 (仙台)	清水 麻希, 葉山 登, 来海 徹太郎, 稲本 浄文
56. 含ハロゲンフェネチルアミンのPd触媒C(sp ²)-H結合選択的アミノカルボニル化	共	2016年11月	第110回有機合成シンポジウム (東京)	種田 宏, 稲本 浄文, 根東 義則
57. ロジウム触媒によるタンデム型閉環一付加プロセスを利用した新規インドールおよびベンゾフラン誘導体合成法の開発	共	2016年10月	第66回日本薬学会近畿支部総会・大会 (大阪)	水上 玲穂, 山内 彩樺, 伊勢 悠見, 来海 徹太郎, 稲本 浄文

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
58. 触媒的 C-H 閉環反応による新規キサンチン類合成法の開発	共	2016年10月	第66回日本薬学会近畿支部総会・大会 (大阪)	清水 麻希, 山内 彩樺, 上田 紗希, 前田 奈美, 西内 亜理沙, 葉山 登, 來海 徹太郎, 稲本 浄文
59. 銅触媒を用いた分子内 C-H アミノ化による新規キサンチン骨格構築法の開発	共	2016年09月	第46回複素環化学討論会 (金沢)	清水 麻希, 山内 彩樺, 上田 紗希, 前田 奈美, 西内 亜理沙, 葉山 登, 來海 徹太郎, 稲本 浄文
60. ロジウム触媒を用いた 2-エチルアニリン誘導体閉環によるインドール-3-カルボキサミド類の合成	共	2016年03月	日本薬学会第136年会 (横浜)	水上 玲穂, 伊勢 悠見, 來海 徹太郎, 稲本 浄文
61. 銅触媒を用いた分子内 C-H アミノ化による新規キサンチン骨格構築法の開発	共	2016年03月	日本薬学会第136年会 (横浜)	清水 麻希, 山内 彩樺, 上田 紗希, 岩本 真奈, 西内 亜理沙, 來海 徹太郎, 稲本 浄文
62. 抗腫瘍活性天然化合物 Rhinacanthins O, P 側鎖の合成研究	共	2016年03月	日本薬学会第136年会 (横浜)	西内 亜理沙, 生島 瑞記, 柴山 友希, 島 綾花里, 清水 麻希, 岩本 真奈, 稲本 浄文, 來海 徹太郎
63. 含ハロゲンフェネチルアミンの Pd 触媒 C(sp ²)-H 結合選択的アミノカルボニル化	共	2015年11月	第45回複素環化学討論会 (東京)	種田 宏, 稲本 浄文, 根東 義則
64. アルコキシメチルクロリドを用いた 2-hydroxy-1,4-naphthoquinone 類の特異な化学選択的エーテル化反応	共	2015年10月	第41回反応と合成の進歩シンポジウム (大阪)	尾形 篤太郎, 吉田 知世, 田中 愛美, 福原 千絵, 清水 麻希, 石井 順子, 西内 亜理沙, 稲本 浄文, 來海 徹太郎
65. 不斉アザマイケルーフッ素化連続反応の開発研究	共	2015年03月	日本薬学会第135年会 (神戸)	清水 麻希, 尾形 篤太郎, 岡島 真純, 金崎 麻衣, 西内 亜理沙, 稲本 浄文, 來海 徹太郎
66. 抗腫瘍活性天然物 Rhinacanthins の合成研究	共	2015年03月	日本薬学会第135年会 (神戸)	西内 亜理沙, 土江 美冴, 島居 恵理, 柴山 友希, 島 綾花里, 尾形 篤太郎, 稲本 浄文, 來海 徹太郎
67. オルトナフトキノン骨格を有する抗腫瘍活性天然物 Lantalucratin C の合成研究	共	2015年03月	日本薬学会第135年会 (神戸)	尾形 篤太郎, 田中 愛美, 石垣 百恵, 吉田 知世, 西内 亜理沙, 稲本 浄文, 來海 徹太郎
68. 抗腫瘍活性を有する天然物 Lantalucratin C の合成研究	共	2014年10月	第64回日本薬学会近畿支部総会・大会 (京都)	田中 愛美, 尾形 篤太郎, 石垣 百恵, 吉田 知世, 西内 亜理沙, 稲本 浄文, 來海 徹太郎
69. 不斉アミノ化を起点とする新規なフッ素導入法の開発と環状アルカロイド類合成への応用	共	2014年10月	第64回日本薬学会近畿支部総会・大会 (京都)	清水 麻季, 尾形 篤太郎, 岡島 真澄, 金崎 麻衣, 西内 亜理沙, 稲本 浄文, 來海 徹太郎
70. 活性化マクロファージの NO 産生を抑制するチオフェン-2-イルおよびチオフェン-3-イルナフトキノン類の合成	共	2014年10月	第64回日本薬学会近畿支部総会・大会 (京都)	尾形 篤太郎, 岩本 まどか, 稲本 浄文, 西内 亜理沙, 來海 徹太郎
71. Madelung 型インドー	共	2014年03月	日本薬学会第13	阿部 将大, 稲本 浄文, 根東 義則

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
ル合成の触媒的閉環プロセスの開発			4年会 (熊本)	
72. ルテニウム触媒 C-H カルボニル化を用いたジベンゾピラノン骨格の新規構築法の開発	共	2013年11月	第39回反応と合成の進歩シンポジウム (福岡)	稲本 浄文, 門川 純, 吉川 晶子, 根東 義則
73. オニウムアミド塩基を用いた触媒的 C(sp ³)-H 脱プロトン化-修飾反応の開発	共	2013年11月	第39回反応と合成の進歩シンポジウム (福岡)	稲本 浄文, 種田 宏, 吉川 晶子, 根東 義則
74. 芳香族ケイ素化合物のカルボキシル化反応	共	2013年10月	第52回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	小林 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
75. ルテニウム触媒 C-H カルボニル化を利用したジベンゾピラノン骨格の新規合成法の開発	共	2013年10月	第52回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	稲本 浄文, 門川 純, 吉川 晶子, 根東 義則
76. 有機亜鉛試薬を用いた, 芳香複素環化合物の酸化的カルボニル化反応の開発	共	2013年10月	第43回複素環化学討論会 (岐阜)	藤村 英範, 吉川 晶子, 稲本 浄文, 根東 義則
77. ルテニウム触媒による C-H 閉環反応を利用した dibenzopyranone 類合成	共	2013年10月	第43回複素環化学討論会 (岐阜)	稲本 浄文, 門川 純, 根東 義則
78. Phosphazanium Salt Promoted Carboxylation of Aryltrimethylsilanes with CO ₂	共	2013年09月	10th International Symposium on Carbanion Chemistry (京都)	Misato Kobayashi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Yoshinori Kondo
79. Organocatalytic Functionalization Making Use of <i>in situ</i> Generated Onium Amide Bases	共	2013年09月	10th International Symposium on Carbanion Chemistry (京都)	<u>Kiyofumi Inamoto</u> , Hitomi Okawa, Yuta Araki, Misato Yonemoto, Shoko Kikkawa, and Yoshinori Kondo
80. Catalytic Deprotonative Functionalization of Heteroarenes by Using Onium Amide Bases	共	2013年06月	1st International Conference & 6th Symposium on Organocatalysis (大津)	Hitomi Okawa, Yutaro Hirono, Shoko Kikkawa, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Yoshinori Kondo
81. Deprotonative Functionalization of C(sp ³)-H Bonds Using Onium Amide Bases	共	2013年05月	1st International Conference & 6th Symposium on Organocatalysis (大津)	<u>Kiyofumi Inamoto</u> , Hiroshi Taneda, Shoko Kikkawa, and Yoshinori Kondo
82. Reactivity of Double-Activated Dialkylzinc Reagents with Fluoride Salts and Donor Solvents	共	2013年05月	The 23rd French-Japanese Symposium on Medicinal and Fine Chemistry (長崎)	Shoko Kikkawa, Hidenori Fujimura, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Yoshinori Kondo
83. Carboxylation of	共	2013年05月	The 23rd French-	Misato Kobayashi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Yoshinori Kondo

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
Alkynylsilanes Using Carbon Dioxide Mediated by Cesium Fluoride			Japanese Symposium on Medicinal and Fine Chemistry (長崎)	
84. Synthesis of 2-Quinolinones through a Tadem-Type, Pd(II)-Catalyzed Oxidative Heck Reaction/ Intramolecular C-H Amidation Sequence	共	2013年05月	The 23rd French-Japanese Symposium on Medicinal and Fine Chemistry (長崎)	Kiyofumi Inamoto, Junpei Kawasaki, Kou Hiroya, Takayuki Doi, and Yoshinori Kondo
85. 二酸化炭素またはイソシアネート類をCl源としたシクロカルボキシル化を經由する3-カルボキシルインドール誘導体合成	共	2013年03月	日本薬学会第133年会 (横浜)	稲本 浄文, 中村 悠花, 浅野 成美, 吉川 晶子, 根東 義則
86. ルテニウム触媒 C-Hカルボニル化反応を用いたクマリン類の新規合成法の開発	共	2013年03月	日本薬学会第133年会 (横浜)	稲本 浄文, 門川 純, 吉川 晶子, 根東 義則
87. p-ベンゾキノンとヨウ化ナトリウム触媒による1,3-ジチアンの脱保護反応	共	2013年03月	日本薬学会第133年会 (横浜)	吉川 晶子, 山田 哲也, 加藤 盛一, 稲本 浄文, 根東 義則
88. オニウムアミド塩基を用いたC(sp ³)-H脱プロトン化-修飾反応の開発	共	2013年03月	日本薬学会第133年会 (横浜)	稲本 浄文, 種田 宏, 吉川 晶子, 根東 義則
89. 界面活性剤を用いた銅触媒による水中でのN-アリアル化反応	共	2012年11月	フルオラス科学研究会第5回シンポジウム (仙台)	稲本 浄文, 門川 純, 野澤 佳菜子, 根東 義則
90. オニウムアミド塩基による触媒的脱プロトン化-修飾反応の開発	共	2012年11月	第38回反応と合成の進歩シンポジウム (東京)	稲本 浄文, 大川 ひとみ, 佐藤 菜央美, 種田 宏, 廣野 佑太郎, 米本 みさと, 吉川 晶子, 根東 義則
91. 界面活性剤を用いた水中での銅触媒 N-アリアル化反応	共	2012年10月	第42回複素環化学討論会 (京都)	稲本 浄文, 門川 純, 野澤 佳菜子, 根東 義則
92. ヨウ化ナトリウム触媒とp-ベンゾキノンによる1,3-ジチアンの脱保護反応	共	2012年10月	第42回複素環化学討論会 (京都)	吉川 晶子, 山田 哲也, 加藤 盛一, 稲本 浄文, 根東 義則
93. 有機触媒によるアミノシランの活性化を介した芳香複素環化合物の修飾反応	共	2012年10月	第42回複素環化学討論会 (京都)	大川 ひとみ, 佐藤 菜央美, 廣野 佑太郎, 米本 みさと, 吉川 晶子, 稲本 浄文, 根東 義則
94. フッ化物塩の添加による有機亜鉛試薬の活性化と反応	共	2012年10月	第51回日本薬学会東北支部大会 (青森)	藤村 英範, 米本 みさと, 吉川 晶子, 稲本 浄文, 根東 義則
95. パラジウム触媒 C-Hアミノ化を基盤とする新規2-キノリノン	共	2012年10月	第42回複素環化学討論会 (京都)	稲本 浄文, 川崎 順平, 齋藤 孔隆, 廣谷 功, 土井 隆行, 根東 義則

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
類合法の開発				
96. フッ化オニウムによるアミノシランの活性化を介した芳香複素環の修飾反応	共	2012年10月	第51回日本薬学会東北支部大会 (青森)	大川 ひとみ, 廣野 佑太郎, 米本 みさと, 吉川 晶子, 稲本 浄文, 根東 義則
97. パラジウム触媒による C-H 結合官能基化を基盤とする新規複素環構築手法の開発	共	2012年06月	第101回有機合成シンポジウム (東京)	稲本 浄文, 川崎 順平, 野澤 佳菜子, 長谷川 千紗, 白石 貢, 廣谷 功, 土井 隆行, 根東 義則
98. フッ化物イオンおよび DMSO を用いた触媒的な亜鉛試薬の活性化	共	2012年06月	第23回万有仙台シンポジウム (仙台)	吉川 晶子, 藤村 英範, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
99. ホスファゼニウムフルオリドを用いたアルキルシランの触媒的芳香族求核置換反応	共	2012年03月	日本薬学会第132年会 (札幌)	佐々木 碧, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
100. フッ化物塩を触媒とするハロゲン亜鉛交換反応	共	2012年03月	日本薬学会第132年会 (札幌)	藤村 英範, 米本 みさと, 吉川 晶子, 稲本 浄文, 根東 義則
101. ミセル系におけるアリアルボロン酸の酸化的ヒドロキシル化反応	共	2012年03月	日本薬学会第132年会 (札幌)	野澤 佳菜子, 稲本 浄文, 米本 みさと, 根東 義則
102. フッ化物塩によるアミド塩基発生と触媒的脱プロトン化反応	共	2012年03月	日本薬学会第132年会 (札幌)	佐藤 菜央美, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
103. 有機触媒によるトリス (トリメチルシリル) アミンの活性化を介した芳香複素環の修飾反応	共	2012年03月	日本薬学会第132年会 (札幌)	大川 ひとみ, 米本 みさと, 廣野 佑太郎, 稲本 浄文, 根東 義則
104. ジアステレオ選択的なケター化反応を基盤とした (-)-cepharamine の不斉全合成研究	共	2011年11月	グローバル COE プログラム「分子系高次構造体化学国際教育研究拠点」シンポジウム (仙台)	廣谷 功, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
105. ミセル系における芳香族ボロン酸の銅触媒ヒドロキシル化反応	共	2011年11月	第100回有機合成シンポジウム (東京)	野澤 佳菜子, 稲本 浄文, 米本 みさと, 根東 義則
106. ホスファゼニルホスフィンオキシド触媒による有機ケイ素化合物活性化を介した修飾反応	共	2011年11月	第37回反応と合成の進歩シンポジウム (徳島)	松井 元志, 下 哲也, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
107. ヨウ化金 (I) によるジチオアセタール類の触媒的脱保護反応	共	2011年11月	第37回反応と合成の進歩シンポジウム (徳島)	加藤 盛一, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
108. 界面活性剤を利用した銅触媒によるアリアルボロン酸の酸化的ヒドロキシル化反応	共	2011年11月	第37回反応と合成の進歩シンポジウム (徳島)	野澤 佳菜子, 稲本 浄文, 米本 みさと, 根東 義則
109. オニウム塩触媒を用いる選択的分子変換	共	2011年11月	第37回反応と合成の進歩シンポジウム (徳島)	米本 みさと, 荒木 勇太, 廣野 佑太郎, 大川 ひとみ, 佐藤 菜央美, 稲本 浄文, 根東 義則

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
反応			ウム (徳島)	
110. 遷移金属を用いた分子内炭素-水素結合官能基化プロセスを経由する 2-キノロン環構築法の開発	共	2011年10月	第50回記念日本薬学会東北支部大会 (仙台)	稲本 浄文, 川崎 順平, 齋藤 孔隆, 廣谷 功, 土井 隆行
111. 非対称化反応を用いた (-)-cepharamine の不斉全合成研究	共	2011年10月	第50回記念日本薬学会東北支部大会 (仙台)	廣谷 功, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
112. 2,2-二置換-1,3-シクロペンタジオン誘導体の非対称化反応の開発	共	2011年10月	第50回記念日本薬学会東北支部大会 (仙台)	廣谷 功, 三原 健, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
113. ホスファゼニウムフルオリド P5F を触媒とするベンザインを介した反応	共	2011年10月	第50回記念日本薬学会東北支部大会 (仙台)	竹林 克紘, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
114. ホスファゼニルホスフィンオキシド触媒を用いた有機ケイ素化合物の活性化および修飾反応	共	2011年10月	第50回記念日本薬学会東北支部大会 (仙台)	松井 元志, 下 哲也, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
115. オニウム塩触媒による炭素-炭素結合形成反応	共	2011年10月	第50回記念日本薬学会東北支部大会 (仙台)	米本 みさと, 荒木 勇太, 廣野 佑太郎, 松井 元志, 大川 ひとみ, 佐藤 菜央美, 稲本 浄文, 根東 義則
116. 有機触媒を用いる複素環 N オキシドの変換反応	共	2011年10月	第41回複素環化学討論会 (熊本)	荒木 勇太, 小林 耕土, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
117. ホスファゼニウム P5 フルオリドによるベンザインを経由する反応	共	2011年10月	第41回複素環化学討論会 (熊本)	竹林 克紘, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
118. 二酸化炭素を用いたシクロカルボキシル化を経由する複素環合成	共	2011年10月	第41回複素環化学討論会 (熊本)	浅野 成美, 稲本 浄文, 米本 みさと, 根東 義則
119. Synthesis of Benzothiazoles from Thiobenzanilides through a Pd-Catalyzed C-H Functionalization/C-S Forming Cyclization Process	共	2011年09月	22nd French-Japanese Symposium of Medicinal and Fine Chemistry (ルーアン, フランス)	Kiyofumi Inamoto, Chisa Hasegawa, Junpei Kawasaki, Kou Hiroya, Takayuki Doi, Yoshinori Kondo
120. 有機超強塩基の合成研究とその応用	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	松井 元志, 下 哲也, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
121. ホスホニウム塩触媒を用いたベンザインを介する Diels-Alder 反応	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	竹林 克紘, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
122. 界面活性剤を用いる芳香族ボロン酸のヒドロキシル化反応	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	野澤 佳菜子, 稲本 浄文, 米本 みさと, 根東 義則

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
123. 金触媒によるジチオアセタール類の加水分解反応	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	加藤 盛一, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
124. 銅触媒を用いるアセチレンの効率的二酸化炭素挿入反応	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	浅野 成美, 小林 耕土, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
125. フッ化オニウムによる炭素-炭素結合形成反応	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	米本 みさと, 廣野 佑太郎, 佐藤 菜央美, 稲本 浄文, 根東 義則
126. 有機分子触媒を用いる複素環 N オキシドの変換反応	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	荒木 勇太, 小林 耕土, 米本 みさと, 稲本 浄文, 根東 義則
127. パラジウム触媒を用いた分子内炭素-水素結合官能基化プロセスを経由する 2-キノロン構築法の開発	共	2011年08月	第28回有機合成化学セミナー (天童)	稲本 浄文, 川崎 順平, 齋藤 孔隆, 廣谷 功, 土井 隆行
128. Onium Fluoride for C-C Bond Formation Reaction	共	2011年08月	Tohoku University Global COE Summer School 2011 (仙台)	Misato Yonemoto, Yutaro Hirono, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Yoshinori Kondo
129. Synthetic Studies of (-)-Cepharamine Using a Desymmetrization Reaction Based on Diastereoselective Ketalization	共	2011年08月	Tohoku University Global COE Summer School 2011 (仙台)	Kou Hiroya, Yusuke Ichihashi, <u>Kiyofumi Inamoto</u> , and Takayuki Doi
130. Synthesis of 2-Substituted Benzothiazoles via Palladium-Catalyzed C-H Functionalization/ C-S Bond Formation	共	2011年07月	16th IUPAC International Symposium on Organometallic Chemistry Directed Towards Organic Synthesis (OMCOS 16) (上海)	<u>Kiyofumi Inamoto</u> , Chisa Hasegawa, Junpei Kawasaki, Kou Hiroya, Takayuki Doi, and Yoshinori Kondo
131. パラジウム触媒による C-H 閉環ベンゾチアゾール合成における酸素の再酸化剤としての利用	共	2011年03月	日本薬学会第131年会 (静岡)	稲本 浄文, 長谷川 千紗, 川崎 順平, 廣谷 功, 土井 隆行
132. 2,2-二置換 1,3-cyclopentanedione 誘導体の非対称化反応を用いる不斉第四級炭素構築法の開発	共	2011年03月	日本薬学会第131年会 (静岡)	廣谷 功, 三原 健, 諏訪 好泰, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
133. ジアステレオ選択的なケタール化反応を利用した 1,3-cyclohexanedione の非対称化反応の開発	共	2011年03月	日本薬学会第131年会 (静岡)	廣谷 功, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
134. パラジウム触媒を用いた C-H 閉環反応によるベンゾチアゾール合成	共	2010年11月	創薬懇話会 2010 in 蔵王 (蔵王)	稲本 浄文, 長谷川 千紗, 川崎 順平, 廣谷 功, 土井 隆行

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
135. 非対称化を用いた (+)-Lycopladin A の全合成	共	2010年10月	第40回複素環化学討論会 (仙台)	廣谷 功, 諏訪 好泰, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
136. パラジウム触媒を用いた C-H 閉環反応における酸素の再酸化剤としての利用	共	2010年10月	第40回複素環化学討論会 (仙台)	稲本 浄文, 川崎 順平, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
137. パラジウム触媒による分子内 C-H 官能基化を利用したベンゾチアゾール環構築	共	2010年09月	平成22年度化学系学協会東北大会 (盛岡)	稲本 浄文, 川崎 順平, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
138. 酸素を再酸化剤として利用するパラジウム触媒を用いた C-H 官能基化によるベンゾチアゾール合成	共	2010年03月	日本薬学会第130年会 (岡山)	稲本 浄文, 長谷川 千紗, 川崎 順平, 廣谷 功, 土井 隆行
139. 不斉非対称化反応を用いた (+)-Lycopladin A の全合成	共	2010年03月	日本薬学会第130年会 (岡山)	廣谷 功, 諏訪 好泰, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
140. パラジウム触媒による分子内炭素-水素結合官能基化を利用した新規ベンゾチアゾール環構築法の開発	共	2009年11月	第96回有機合成シンポジウム (東京)	稲本 浄文, 長谷川 千紗, 川崎 順平, 廣谷 功, 土井 隆行
141. 非対称化反応を用いた (-)-Cepharamine の不斉全合成研究	共	2009年11月	第35回反応と合成の進歩シンポジウム (金沢)	廣谷 功, 市橋 佑介, 猪飼 哲朗, 関岡 竜一, 稲本 浄文, 土井 隆行
142. パラジウム触媒を用いた分子内 Tsuji アリル化反応による ベータ-アルケニル-アルファ-アリールシクロペンタノン誘導体の不斉合成とその応用	共	2009年11月	第35回反応と合成の進歩シンポジウム (金沢)	廣谷 功, 星野 恒文, 中村 優子, 稲本 浄文, 土井 隆行
143. 非対称化反応を基盤とする不斉第四級炭素構築法の開発	共	2009年11月	第35回反応と合成の進歩シンポジウム (金沢)	廣谷 功, 市橋 佑介, 諏訪 好泰, 猪飼 哲朗, 稲本 浄文, 土井 隆行
144. 非対称化反応を基盤とした不斉第四級炭素構築法の開発	共	2009年10月	第48回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	廣谷 功, 市橋 佑介, 諏訪 好泰, 猪飼 哲朗, 稲本 浄文, 土井 隆行
145. パラジウム触媒による C-H アミノ化反応を利用した 4-アリール-2-キノロン類合成	共	2009年10月	第48回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	稲本 浄文, 齋藤 孔隆, 廣谷 功, 土井 隆行
146. パラジウム触媒による炭素-水素結合活性化と続く分子内アミノ化反応を利用した効率的 2-キノロン誘導体合成法の開発	共	2009年10月	第39回複素環化学討論会 (柏)	稲本 浄文, 齋藤 孔隆, 廣谷 功, 土井 隆行
147. Palladium-Catalyzed C-H Functionalization	共	2009年09月	第56回有機金属化学討論会 (京都)	Kiyofumi Inamoto, Tadataka Saito, Chisa Hasegawa, Junpei Kawasaki, Kou Hiroya, Takayuki Doi

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
for the Synthesis of Heterocyclic Compounds 148. Synthesis of Nitrogen-Based Heterocyclic Compounds via Palladium-Catalyzed C-H Functionalization	共	2009年07月	15th IUPAC International Symposium on Organometallic Chemistry Directed Towards Organic Synthesis (OMCOS 15) (グラスゴー, イギリス)	Kiyofumi Inamoto, Tadataka Saito, Chisa Hasegawa, Kou Hiroya, Takayuki Doi
149.パラジウム触媒による炭素-水素結合活性化と続く分子内炭素-硫黄結合形成反応を利用する新規ベンゾチアゾール環構築法の開発	共	2009年06月	第6回東北大学バイオサイエンスシンポジウム	稲本 浄文, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
150.パラジウム触媒による炭素-水素結合官能基化を利用した効率的複素環化合物構築手法の開発	共	2009年06月	第95回有機合成シンポジウム(東京)	稲本 浄文, 齋藤 孔隆, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
151.パラジウム触媒による炭素-水素結合活性化を利用した効率的含窒素複素環化合物構築法の開発	共	2009年03月	日本薬学会第129年会(京都)	稲本 浄文, 齋藤 孔隆, 廣谷 功, 土井 隆行
152.パラジウム触媒による炭素-水素結合活性化と続く分子内炭素-硫黄結合形成反応を利用する, 新規ベンゾチアゾール環構築法の開発	共	2009年03月	日本薬学会第129年会(京都)	稲本 浄文, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
153.パラジウム触媒を用いた分子内 Tsuji-Trost 反応によるベータ-アルケニル-アルファ-アリールシクロペンタノン誘導体の不斉合成研究	共	2009年03月	日本薬学会第129年会(京都)	廣谷 功, 星野 恒文, 中村 優子, 稲本 浄文, 土井 隆行
154.シリルケテンアセタールの2-ピリジノン誘導体への求核付加反応を基盤とする含窒素生理活性化合物の合成研究	共	2008年11月	第27回メディシナルケミストリーシンポジウム(大阪)	廣谷 功, 川本 啓, 稲本 浄文, 土井 隆行
155.パラジウム触媒による炭素-水素結合活性化を利用した効率的含硫黄複素環化合物構築法の開発	共	2008年11月	第27回メディシナルケミストリーシンポジウム(大阪)	稲本 浄文, 荒井 ゆかり, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
156.非対称化反応を基盤とする不斉第四級炭素構築法を用いた	共	2008年11月	第38回複素環化学討論会(福山)	廣谷 功, 関岡 竜一, 稲本 浄文, 土井 隆行

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
(-)-Cepharamine の全合成研究				
157.パラジウム触媒炭素-水素結合活性化を利用する新規置換インドール類合成法の開発	共	2008年11月	第38回複素環化学討論会(福山)	稲本 浄文, 齋藤 孔隆, 廣谷 功, 土井 隆行
158.パラジウム触媒炭素-水素結合活性化を利用する効率的含硫黄複素環化合物構築法の開発	共	2008年11月	第38回複素環化学討論会(福山)	稲本 浄文, 荒井 ゆかり, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
159.対称化合物の非対称化反応による不斉第四級炭素構築法の開発とその応用	共	2008年10月	第34回反応と合成の進歩シンポジウム(京都)	廣谷 功 市橋 佑介, 諏訪 好泰, 川住 宗生, 稲本 浄文, 土井 隆行
160.NHC由来 pincer 型ニッケル錯体の合成とその触媒機能の開発	共	2008年10月	第34回反応と合成の進歩シンポジウム(京都)	黒田 潤一, 稲本 浄文, 廣谷 功, 土井 隆行
161.白金触媒を用いるアセチレンの位置選択的水和反応の開発	共	2008年10月	第34回反応と合成の進歩シンポジウム(京都)	廣谷 功, 荻原 謙太郎, 稲本 浄文, 土井 隆行
162.パラジウム触媒炭素-水素結合活性化と続く分子内炭素-硫黄結合形成反応を利用する, 新規ベンゾチアゾール環構築法の開発	共	2008年10月	第47回日本薬学会東北支部大会(岩手)	稲本 浄文, 長谷川 千紗, 廣谷 功, 土井 隆行
163.白金触媒を用いるアセチレンの位置選択的水和反応の開発	共	2008年10月	第47回日本薬学会東北支部大会(岩手)	廣谷 功, 荻原 謙太郎, 稲本 浄文, 土井 隆行
164.パラジウム触媒を用いたチオエノール類からの直接的ベンゾチオフェン化合物合成法の開発	共	2008年10月	第47回日本薬学会東北支部大会(岩手)	稲本 浄文, 荒井 ゆかり, 廣谷 功, 土井 隆行
165.パラジウム触媒閉環反応を利用する新規ベンゾチオフェン環構築法の開発	共	2008年10月	平成20年度化学系学協会東北大会(青森)	稲本 浄文, 荒井 ゆかり, 廣谷 功, 土井 隆行
166.非対称化を基盤とする不斉第四級炭素構築法を用いた(-)-Cepharamine の全合成研究	共	2008年10月	平成20年度化学系学協会東北大会(青森)	廣谷 功, 関岡 竜一, 稲本 浄文, 土井 隆行
167.ベータ-オキソエノンに対する核間位不斉炭素構築法の開発とその応用	共	2008年10月	平成20年度化学系学協会東北大会(青森)	廣谷 功, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 土井 隆行
168. Michael Addition of Silyl Ketene Acetal to 2-Pyridinone Derivatives: Reactivity and Application to	共	2008年06月	17th International Symposium on Organic Synthesis (デジョン, 韓国)	Kou Hiroya, Kei Kawamoto, Kiyofumi Inamoto, Takayuki Doi

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
Synthetic Study of Awajanomycin				
169. Synthesis and Catalytic Activity of N-Heterocyclic Carbene-Derived Pincer-Type Nickel (II) Complexes	共	2008年06月	17th International Symposium on Organic Synthesis (デジヨン, 韓国)	Kiyofumi Inamoto, Jun-ichi Kuroda, Kou Hiroya, Takayuki Doi
170. パラジウム触媒炭素-水素結合活性化を経由する, 置換インドールおよびベンゾチオフェン類の合成	共	2008年03月	日本薬学会第128年会 (横浜)	稲本 浄文, 荒井 ゆかり, 齋藤 孔隆, 坂本 尚夫, 廣谷 功
171. パラジウム触媒炭素-水素結合活性化・分子内アミノ化反応を利用した, 新規インダゾール合成法の開発	共	2008年03月	日本薬学会第128年会 (横浜)	稲本 浄文, 齋藤 孔隆, 勝野 良佳, 坂本 尚夫, 廣谷 功
172. 白金触媒を用いるアセチレンの位置選択的水和反応の開発	共	2008年03月	日本薬学会第128年会 (横浜)	廣谷 功, 荻原 謙太郎, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
173. 分子内アリル化反応を基盤とする多環性キノロン誘導体の合成研究	共	2008年03月	日本薬学会第128年会 (横浜)	廣谷 功, 中村 優子, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
174. 非対称化による不斉第四級炭素構築法を基盤とする (-)-Cepharamine の全合成研究	共	2008年03月	日本薬学会第128年会 (横浜)	廣谷 功, 関岡 竜一, 淵野 光記, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
175. Peperomia Duclouxii から単離されたポリケチドの不斉全合成研究	共	2008年03月	日本薬学会第128年会 (横浜)	廣谷 功, 市橋 佑介, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
176. 2-ピリジノン誘導体の官能基化法の開発と Awajanomycin の合成研究	共	2007年11月	第33回反応と合成の進歩シンポジウム (長崎)	廣谷 功, 川本 啓, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
177. NHC 由来 pincer 型ニッケル錯体の合成とその触媒反応への応用	共	2007年11月	第33回反応と合成の進歩シンポジウム (長崎)	稲本 浄文, 黒田 潤一, 坂本 尚夫, 廣谷 功
178. Pincer 型カルベンを配位子とする鉄錯体の合成と触媒反応への応用	共	2007年10月	第46回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	稲本 浄文, 山本 明生, 廣谷 功, 坂本 尚夫
179. 分子内アリル化反応を利用するベンジル位不斉 4 級炭素構築法の開発と応用	共	2007年10月	第46回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	廣谷 功, 中村 優子, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
180. 核間位第四級炭素構築法の開発と Trichothecene 骨格を有する天然物 Scripene の全合成への応用	共	2007年10月	第46回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	廣谷 功, 古殿 愛, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
181. 抗腫瘍活性天然物	共	2007年10月	第46回日本薬学	廣谷 功, 小池 磨由, 松本 重充, 稲本 浄文, 坂本 尚夫

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
Stephacidin A の不斉全合成研究			会東北支部大会 (仙台)	
182. Catalytic Activities of a Pincer-Type Bis(imidazolin-2-ylidene) Nickel (II) Complex in Cross-Coupling Reactions of Aryl Halides	共	2007年08月	14h IUPAC International Symposium on Organometallic Chemistry Directed Towards Organic Synthesis (OMCOS 16) (奈良)	<u>Kiyofumi Inamoto</u> , Jun-ichi Kuroda, Takao Sakamoto, Kou Hiroya
183. Pd(II)-Catalyzed C-H Activation/Intramolecular Amination Reaction: A New Route to 3-Substituted Indazoles	共	2007年08月	14h IUPAC International Symposium on Organometallic Chemistry Directed Towards Organic Synthesis (OMCOS 16) (奈良)	<u>Kiyofumi Inamoto</u> , Tadataka Saito, Mika Katsuno, Takao Sakamoto, Kou Hiroya
184. 10ヶ月にわたるアメリカ・MITでの研究生活を終えて	単	2007年07月	第42回天然物化学談話会 (仙台)	稲本 浄文
185. Pincer型カルベンリガンドを用いるニッケル触媒クロスカップリング反応の検討	共	2007年03月	日本薬学会第127年会 (富山)	稲本 浄文, 黒田 潤一, 廣谷 功, 坂本 尚夫
186. Combination of Nickel/N-Heterocyclic Carbene (NHC) as a Novel Catalyst System for the Nickel-Catalyzed Heck Reaction	共	2005年12月	2005 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies (ホノルル, ハワイ)	<u>Kiyofumi Inamoto</u> , Jun-ichi Kuroda, Tomohiro Danjo, Takao Sakamoto
187. Investigation of Transition Metal-Catalyzed Reactions Using Pincer-Type N-Heterocyclic Carbene Ligands	共	2005年12月	2005 International Chemical Congress of Pacific Basin Societies (ホノルル, ハワイ)	<u>Kiyofumi Inamoto</u> , Jun-ichi Kuroda, Tomohiro Danjo, Takao Sakamoto
188. 分子内パラジウム触媒反応による効率的縮合複素環化合物構築法の開発と応用	共	2005年11月	第31回反応と合成の進歩シンポジウム (神戸)	稲本 浄文, 勝野 良佳, 廣谷 功, 坂本 尚夫
189. カルベンをリガンドとして用いるニッケル触媒反応の開発	共	2005年09月	平成17年度化学系学協会東北大会 (仙台)	稲本 浄文, 黒田 潤一, 檀上 友浩, 坂本 尚夫
190. N-ヘテロサイクリックカルベンリガンドを用いる遷移金属触媒反応の検討	共	2005年05月	第16回万有仙台シンポジウム (仙台)	稲本 浄文, 黒田 潤一, 檀上 友浩, 坂本 尚夫
191. N-ヘテロサイクリックカルベンを配位子	共	2005年05月	第3回次世代を担う有機化学シンポ	稲本 浄文, 黒田 潤一, 檀上 友浩, 坂本 尚夫

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
とする新規遷移金属触媒反応の開発	共	2005年03月	ジウム (東京) 日本薬学会第125年会 (東京)	稲本 浄文, 黒田 潤一, 檀上 友浩, 坂本 尚夫
192. N-ヘテロサイクリックカルベンを配位子とする遷移金属触媒反応の検討	共	2004年11月	第34回複素環化学討論会 (金沢)	稲本 浄文, 廣谷 功, 大澤 一利, 吉野 崇, 勝野 良佳, 根東 義則, 坂本 尚夫
193. パラジウム触媒反応を用いる新規縮合複素環構築法の開発	共	2004年10月	第43回日本薬学会東北支部大会 (秋田)	廣谷 功, 明石 隆信, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
194. 酸素原子置換アレンのパラジウム触媒による閉環反応の開発	共	2004年10月	第30回反応と合成の進歩シンポジウム (札幌)	稲本 浄文, 廣谷 功, 大澤 一利, 坂本 尚夫
195. ヘテロ原子置換アレンをを用いるヘテロ環化合物合成法の開発と応用	共	2003年10月	第42回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	稲本 浄文, 吉野 崇, 廣谷 功, 鈴木 郁恵, 坂本 尚夫
196. Pd 触媒アミノ化反応を鍵とした Nigellidine の合成研究	共	2003年10月	第33回複素環化学討論会 (札幌)	稲本 浄文, 吉野 崇, 廣谷 功, 鈴木 郁恵, 坂本 尚夫
197. Pd 触媒によるインダゾール環構築と Nigellidine 合成への応用	共	2003年03月	日本薬学会第123年会 (長崎)	稲本 浄文, 鈴木 郁恵, 廣谷 功, 坂本 尚夫
198. Pd 触媒アミノ化反応によるインダゾール環構築とその Nigellidine 合成への応用	共	2002年12月	第32回複素環化学討論会 (徳島)	稲本 浄文, 鈴木 郁恵, 廣谷 功, 坂本 尚夫
199. パラジウム触媒を用いるヘテロ環新合成法の開発	共	2002年03月	日本薬学会第122年会 (千葉)	稲本 浄文, 廣谷 功, 大澤 一利, 中澤 哲郎, 坂本 尚夫
200. ヘテロ原子置換アレンをを用いた位置選択的 Pd 触媒閉環反応とその応用	共	2000年03月	日本薬学会第120年会 (岐阜)	稲本 浄文, 坂本 尚夫, 根東 義則
201. 高分子固定化活性メチレンを用いる Pd 触媒クロスカップリング反応	共	1999年11月	第30回複素環化学討論会 (東京)	根東 義則, 稲本 浄文, 坂本 尚夫
202. 光シクロリリス反応を用いるヘテロ環化合物の固相合成	共	1999年10月	第38回日本薬学会東北支部大会 (仙台)	稲本 浄文, 坂本 尚夫, 根東 義則
203. 光閉環反応を利用するヘテロ環化合物の固相合成	共			
3. 総説				
1. Synthesis of Heterocyclic Compounds through Palladium-Catalyzed C-H Cyclization Processes	単	2013年10月	Chemical & Pharmaceutical Bulletin 2013, 61(10), 987-996 (The Pharmaceutical Society of Japan)	パラジウムを用いた触媒的 C-H 閉環反応を利用した複素環合成に関する自身の研究成果をまとめた総説.
2. パラジウム触媒による炭素-水素結合官能基化 ~インダゾール, インドール, ベ	共	2010年03月	ファルマシア 2010, 46(3), 229-234 (日本薬学会)	パラジウム触媒による C-H 官能基化を利用する複素環化合物合成についての総説. (稲本 浄文,* 廣谷 功, 土井 隆行*)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3. 総説				
ンゾチオフェン、ベンゾチアゾールの環構築～ 3.パラジウム触媒アミノ化反応を基盤とする効率的インダゾール合成法の開発と応用	単	2008年07月	薬学雑誌 2008, 128(7), 997-1005 (日本薬学会)	パラジウム触媒による "Buchwald-Hartwig アミノ化" と "C-H アミノ化" という 2 つの手法を用いたインダゾール環構築法に関する総説。
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. 革新的複素環構築法創出を指向する触媒的 C-H 閉環反応の新展開	単	2022年4月から2025年3月まで	科研費	基盤研究 (C)
2. C-H 閉環プロセスによる複素環構築を基軸とした未踏分子変換プロセスへの挑戦	単	2019年4月から2022年3月まで	科研費	基盤研究 (C)
3. 遷移金属を用いた触媒的 C-H 官能基化による「新規複素環構築法創出研究」の新展開	単	2018年度	武田科学振興財団	2018年度薬学系研究助成
4. 触媒的 C-H 官能基化を基盤とする高効率複素環構築法の開発研究	単	2016年4月から2019年3月まで	科研費	基盤研究 (C)
5. 遷移金属触媒による炭素-水素結合活性化を基盤とした革新的分子構築法の開発	単	2016年度	ひょうご科学技術協会	学術研究助成
6. 有機分子触媒による脱プロトン化を基盤とする新規分子修飾法の開発と不斉反応への展開	単	2014年度	有機合成化学協会	中外製薬研究企画賞
7. 触媒的炭素-水素結合官能基化を基盤とする複素環合成	単	2014年度	上原記念生命科学財団	研究奨励金
8. 新規複素環構築法創出を指向する触媒的炭素-水素結合活性化に関する研究	単	2013年4月から2016年3月まで	科研費	基盤研究 (C)
9. パラジウムを用いた触媒的炭素-水素結合官能基化を基盤とする高効率分子変換プロセスの開発研究	単	2013年度	インテリジェント・コスモス学術振興財団	第12回インテリジェント・コスモス奨励賞
10. パラジウム触媒 C-H 官能基化を基盤とする複素環構築の新展開	単	2011年4月から2013年3月まで	科研費	若手研究 (B)
11. 触媒的炭素-水素結合 (C-H) 活性化を基盤とする高効率・革	単	2011年度	有機合成化学協会	アステラス製薬研究企画賞

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
新的複素環構築プロセスの確立と体系化 12. パラジウム触媒「炭素-水素結合活性化」の実用的活用～高効率の分子構築法を目指して	単	2008年4月から2010年3月まで	科研費	若手研究 (B)
13. パラジウム触媒炭素-水素結合活性化を基盤とする新規効率的分子構築法の開拓	単	2007年度	東北大学グローバルCOEプログラム「分子系高次構造体化学国際教育研究拠点」	若手研究奨励費
14. アルキンへの求核攻撃による閉環反応の展開および生理活性化合物全合成への応用	共	2006年4月から2008年3月まで	科研費	基盤研究 (B) (研究分担者)

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2014年5月	第25回山下太郎学術研究奨励賞 受賞
2. 2013年12月	有機合成化学協会中外製薬研究企画賞 受賞
3. 2013年7月	東北大学大学院薬学研究科研究科長賞 受賞
4. 2013年5月	第12回インテリジェント・コスモス奨励賞 受賞
5. 2013年3月	平成25年度日本薬学会奨励賞 受賞
6. 2013年度から	日本化学会 会員
7. 2011年12月	有機合成化学協会アステラス製薬研究企画賞 受賞
8. 2009年7月	東北大学大学院薬学研究科研究科長賞 受賞
9. 2009年度から	有機合成化学協会 会員
10. 2007年10月	日本薬学会東北支部奨励賞 受賞
11. 2000年度から	日本薬学会 会員